

## 『竹取物語』の受容

朝プリントを通して

間瀬 由美

### 1 はじめに

「かぐや姫の話」（以下、一冊のテキストを「竹取物語」とする。絵本などに加工された作品、かぐや姫の誕生と昇天のみを扱った作品は「かぐや姫の話」として区別する）を教科書で学んだ学習者は、この物語から二重に「隔てられて」しまう。

一つめの「隔たり」は、幼い頃、絵本を読んだり誰かから語ってもらったりして「かぐや姫の話」を知っていることからくる。「かぐや姫の話」を知っていることが悪いというのではもちろんないが、多くの教科書に採録されている「なよたけのかぐや姫」と「天の羽衣」のみを学習するのでは、「既知の話を未知のことばで読んだ」体験で終わってしまわないか。これでは、「竹取物語」Ⅱ「かぐや姫の話」であるという認識が強化されるだけで、学習者は本物の「竹取物語」から隔てられたままになる。

二つめの「隔たり」は、教科書での位置づけと授業者の扱いに

よって生じる。稿者が使用していた国語総合の教科書には、単元ごとに文法事項に関する「古文学習のしおり」が付けられており、この教材でこの文法事項を学ぶという配列がなされていた。「敬語」の説明が付けられている「竹取物語」（「かぐや姫の話」）は、敬語を学ぶ教材としてある。学習者が内容を知っているため、内容理解に困難を伴わず敬語学習ができる、との配慮かもしれないが、これでは敬語学習のための「竹取物語」が強調されてしまう。

「竹取物語」には「かぐや姫の話」とは全く違う面白さがある。二重の「隔たり」を取り払い、学習者に「竹取物語」の面白さを感じさせることができないかという稿者の意識から、「竹取物語」全文を読む学習を行った。

また、「竹取物語」を「かぐや姫の話」として教えることは、古典に親しませるための一つの方策とも考えられるが、この例に限らず、古典の実践には、学習者を古典にどう親しませるかというものが多<sup>い</sup>。古典に親しみを感<sup>じ</sup>させ、時代・社会状況を与えながら、内容に対して感じた学習者の共感や違和感を意識させる。このような学

習は当然重要だが、そこでの関心は描かれた内容そのものである。内容そのものを読むことから一歩進み、今ここにいる自分と当時の価値観の中にある語り手をもっと対峙させることはできないか。語り手はどのような価値観の世界に身を置き、どんなことを語っているのかを考えれば、今この世界にいる自分を古典の世界と向きあわせやすくなる。共感・違和感を一歩進めて、語り手と対話させてい。稿者は古典の学習においてこのような意識を持っている。本提案は、高校一年生と「竹取物語」全文を読んだ報告である。その際に作成したテキスト、全文を読んだ生徒の感想、その後この学習がどう表れたかの三点について示し、分析・考察したい。

## 2 実践の概要と考察

2007年9月～2008年2月

### (1) 経緯

十九年度当初から、登校～一時間目(朝読書・SHRも含む)までを有効に使うため学年の数学担当者が、毎朝数学のプリント学習を行っていた。九月からは、国語の学習もさせてみてはどうかと声を掛けられた。それならば、半年間朝のプリント学習で『竹取物語』の全文を読ませてみようと考え、プリント作成を試みた。(資料1)

### (2) 対象

米子北斗高等学校 平成十九年度 高校一年生 二クラス(どちらも30名)

進学を目指す私立の中高一貫校(一学年二クラス)である。中学三年次の後半に「国語総合」の学習に入っており、古文に関しては、高校入学時に「用言の活用」の学習を終えている。

### (3) 内容と方法

教科書採録部分(学習した「なよたけのかぐや姫」「天の羽衣」)以外を、B5用紙で十三行前後の本文になるよう区切り、文法・内容問題をつけたプリントにする。稿者は、当時、対象学年に所属しており、国語総合5単位を担当していた。朝プリントは、両クラスに古典の授業がある曜日に実施し、プリントの口語訳・解答を同じ日の授業時に配布する。その際、授業の初め五分程度ではあるが、内容を確認したり、生徒に感想を求めたりした。原文全てを読んだ生徒もいるが、遅刻寸前で来る生徒は口語訳中心に読むことになる。そのため、原文に戻りながら解説するこの五分は貴重であった。

プリント作成時の留意点は以下の通り。

- ①全文を読むことになるので、話の流れがわかるよう、プリントには短いタイトルをつける。(第3回から)
- ②文法事項については、助動詞の意味と活用形↓敬語(種類と方向)↓敬語の口語訳、と難易度を上げる。
- ③授業で学習しているレベルと同程度の口語訳を問題に入れる。
- ④内容理解の問題は、簡単にわかるもの、後の部分を理解するためには押さえておきたい問いにする。
- ⑤その時々々の古文の授業やテストなどで出てきた単語・文法事項と重なるものがあれば、問題にできるだけ取り入れる。(これはプリント)

ント学習を進めながら気をつけるようになったことである)

なお、適当な長さでひとまとまりの内容を区切ろうとしたため、内容に大きく関わらない範囲で、稿者が短く書き換えたり省略したりした部分もある。プリントは全部で二八回分になった。本文は『日本古典文学全集』（小学館）による。

#### (4) 分析と考察―生徒の感想から―

期末考査（2008年3月初め実施）の最後に「朝プリントで読んで『竹取物語』を思い出し、感想を書きなさい。」という質問を置いた。この感想をもとに、以下、分類と分析を行う。

##### ① 「かぐや姫の話」との違い

・竹取物語がこんなに長い話だとは知らなかった。でも、全部読めてよかったです。(m1)

・絵本で読んだのか誰かから聞いたのか忘れたけど、今までに知っていた竹取物語と違って驚いた。授業でやった最初と最後の部分が見ながら知っている（と思われる）竹取物語だと思った。(f1)

・昔話で知っている話なので、古典でもすんなり入っていきませんでした。でもけっこう違うところもあって面白かった。5人の貴族の所はそれぞれが別の物語のようになっていて面白い。嘘をついてごまかそうとする人がいたり、欲を出したり、今も同じような人がいると思う。子安貝の所で、本物だと思ったら古くそだった、という結末が笑えた。(f2)

既知の「かぐや姫の話」と「竹取物語」との異なりの指摘である。

##### ② 天皇制への気付き

・かぐや姫に求婚する5人の貴公子が出てきて、最後に帝が出てくる。当然と言えば当然だが、帝の所だけ特別だった。かぐや姫は、帝には、5人の貴公子にしたように難題を出さない。出せないのだから。帝だから。でも、翁が、帝の命令よりも、かぐや姫の気持ちで大事にして「死ぬほどなら結婚しなくてよい」と言ったところが印象に残った。帝の命令で断れないんじゃないか。(m2)

・帝が最後に出てきたが、これは意味があると思う。みんな断られて最後が帝ならどうだという。その帝のところでかぐや姫の本当のことがわかる。ここまでは性格の悪いかぐや姫も、変なじいさんだった翁もいい人になってめでたしめでたしで終わる。作者の手だという気がした。(m3)

・帝(天皇?)が求婚してもうまいかない、ということに作者の言いたいことがあるのでは?(m4)

これらは、帝と貴公子たちとの描かれ方の違いに注目した感想である。滑稽に描かれている貴公子とそうではない帝を対比することにより、テキストの背後に当然のこととしてある天皇制に触れている(m2・m3)。m4は、そのような帝をも拒絶する所に語り手の意図を感じている。権力への反抗を読み取っているのではないか。

##### ③ 貴族への批判

・5人の貴族たちがうまくいかないのは、貴族を批判したかったからだと思う。貴族は批判しているが、帝は批判していない。(f3)

・5人の貴公子はバカな所もあるけど、けっこうかわいそう。好き

な人のために一生懸命になってもむくわれないから。でも、お金で解決しようとしたり、部下にひどいことをしたりする悪人的な貴公子たちだから、作者に罰を与えられたのかも知れないと思っ  
た。(f 4)

f 3は、貴公子たちと帝との違いに注目し、貴公子たちの描かれ方から、語り手が貴族批判を意図していると述べる。f 4も、未熟な述べ方ではあるが(作者に罰を与えられた)、語り手による貴公子への批判を意識した読みである。ただし、f 3とは違って語り手の意図という視点はなく、貴公子たちを批判しつつも同情する、人物そのものへの感想になっている。

#### ④ かぐや姫の人物像の深まり

・小あくま的な(?) かぐや姫が印象に残りました。美しさで男の人を惑わしておきながら結婚しないのは、今のドラマにもありそう。美人は得です。それに振り回されている男(貴公子と帝)はまぬけだなーと思いました。(f 5)

・かぐや姫は、小さくてかわいいイメージだったのに、けっこうキツイ。つばめの子安員の貴公子ははしこら落ちたことがきっかけで死んでしまった。他にもみんなひどい目に合っている。(おおげさなのもある) かぐや姫はそれでも平気な感じ。前に思っていたのと印象が変わった。(f 6)

・求婚者を試しているかぐや姫は面白い。5人は変な人たちだったと思うので、その人たちを手玉にとっていたのは結構笑える。でも、最後におじいさんとおばあさんを思いやるころはかわいいそうでした……。 (f 7)

これらは、かぐや姫の、貴公子たちへの態度から受けた印象が中心である。美しいだけではないかぐや姫像が読み取れる。人物への共感や批評といったレベルの読みではあるが、語りに添って全文を読んだことにより、かぐや姫を多面的にとらえられたのである。「小さくてかわいい」だけでなく「小あくま的」「キツイ」と感じたときに、生徒自身が持っている言葉でかぐや姫を理解できたといえる。

#### ⑤ 翁の面白さ

・よかったのは、5人の貴公子の部分です。いろんなパターンがあっただけでもないかぐや姫を貴族と結婚させようとしていたりして、笑える部分もありました。おうなはあまり書かれていませんでした。(f 8)

・五人の貴族の所は長かったけど、面白かったと思う。竹取のおじいさんと翁は違う人のようだ。成り上がり的で、かぐや姫を結婚させようと強引なところもある。誰だったか忘れたけど、もうこの貴族と結婚しなさいという感じで寝室の準備をしていたりした。気が早すぎ。貴族と結婚させることで自分も豊かになって安心してたかったのか。(f 9)

翁についての直接の感想は少ないが、プリント学習中、翁の言動に反応する生徒は多かった。f 8・f 9が述べているのは、翁が帝に官位を与えると喜ぶ場面や「はや、この皇子にあひ仕うまつりたまへ」「聞のうちしつらひなどす」などの表現である。これらは、プリントを解説する際、多くの生徒が、これまでの印象とは異なる

翁を特に感じていた部分である。

⑥ 「作者」について

・竹取物語は気に入りました。内容が盛りだくさんなので、どこがと言うのは説明しにくいです。作者は、冒険も恋愛も未知の世界(月)も、天皇制も親子(?)の愛も色々書きたいことがあったんじゃないか、と思います。ついでに、言葉の説明まで書いて、これでもかかって感じます。まぬけで腹が立つ所もあるけど憎めない5人の貴公子とか翁とか、実は小悪魔なかくや姫とか人物も面白い。全部読めてよかったです。(f 10)

・平安時代(?)の人がこんな話を書いて、それが今まで残っているというのはいすごいと思った。人物も個性的でイメージできる。でも、何を伝えたかったのか考えてしまう。楽しい話を書きたかったのか、悲しい別れ、絆(翁とおうなとかくや姫)を書きたかったのか、それともまぬけな貴族を笑っているのか。おそらく全部だと思います。他にあつたら教えて下さい。(f 11)

・昔の人が、かくや姫を月から来たようにしたり、月にも王がいたり、想像して竹取物語を書いたのはすごいと思う。(f 12)

・竹取物語の作者は絶対「男」だと思います。先生は未詳(?)って言われましたが。前に先生と話したことがあつたけど、重松清

の小説に出てくる女の人はみんな同じパターンで面白くないけど、男の人はいろいろいて、絶対男の人の気持ちの方がよく書かれています。作者が男だから女の人の気持ちとか書くのが苦手なのかなって。「竹取物語」にも当てはまりませんか?かくや姫よりも翁と5人の貴公子が詳しく書かれていて個性的だと思います。おう

なほとんど書かれてないし。(f 13)

語り手の想像力に注目し(f 11・f 12) 評価している感想もある。

f 10・f 11は、内容に異なりはあるが、ともに語り手の意図を考えている。テキストに描かれた様々なエピソードを挙げ、語り手のメッセージとしている。f 13は男女の人物の描かれ方の違いに注目し「作者は男」と推測している。

⑦ 物語の位置づけ

・「物語の親」(稿者注:「祖」のこと)という説明を聞いたが、不思議な美しい人が主人公でその人を巡る恋愛の話、でも、それがうまくいかないというところが物語の基本みたいな感じだからかなーと思った。(f 14)

・先生はファンタジーかもと言ってたけど、空想小説の方が合うと思う。奇想天外な古典の空想小説でおもしろかったです。古典はわからなくてすみません。(m 5)

授業の初めに、「物語の祖」と言われていることを説明し、朝プリントの途中で「ファンタジー」という言葉を出したと思うが、このような言葉から、「竹取物語」を位置づけようとしている。

3 その後の『竹取物語』

2008年8月

朝のプリント学習が終了して半年後、文化祭のクラスの出し物で、文系クラス(40名)が「竹取物語」の劇をすることになった。(文化祭のクラスの出し物は、展示・舞台発表、その他許可されたものができる。)稿者は2008年度、この学年の現代文のみの担当であり、

学年を離れていたので経緯の詳細はわからない。彼らは、「竹取物語をやるから見に来て」と言っただけで、自分たちで台本、衣装、小道具全てを作ったようである。文化祭後に提供してもらった台本は資料として示す(資料2)。

文化祭終了後の生徒の言葉を以下に示す。稿者と生徒(女子数人。台本を書いた生徒が中心)との会話メモからの抜粋のため、完全なものではない。

a 高1の時のプリントを出してきて、思い出しながら台本を作った。でも、普通の「竹取物語」(稿者注…おそらく本提案でいう「かぐや姫の話」のこと)になった気がする。何を要求されてだめだったか、5人の貴公子はちゃんと出そうと思った。

b 翁がよかったでしょう。みんなでAくんしかおらんってことになって。お調子者でびったりだし。自分でも納得してたよね。演技もうまくない？

c かぐや姫のBちゃんはちよつと意地悪な感じがいい。5人に対しては。そういう人になってたよね。前に「竹取物語」読んだときのイメージでみんな劇を作った感じ。

d 月からの使者と対抗する兵士の道具と衣装(稿者注…段ボール製はCくんが便覧とか見て作った。すごくよく出来てたけど多分、弓とか鎌倉時代の武士のでは？便覧ってそれしか載ってない。

e 5人の貴公子の衣装の色は、古典っぽい色にしたけどわかりましたか？(稿者注…くすんだ色。鶯色のような、縹色のような。全て違う色。色を混ぜて白い布に塗ったらしい)

f 月からの迎えの背中についてたのは(稿者注…羽衣?)、赤い布の中に針金を入れた。天女の感じで。

台本と生徒たちの言葉から次のことがわかる。

a からは、プリント学習と劇との関連がうかがえる。五人の貴公子は表現しなかった人物のようである。ただ、貴公子五人は登場したものの、全員の物語を描くことは出来ていない。台本からもわかるように、四人については、手書きのイラストをパソコンに取り込み、ナレーションに合わせて紙芝居風にスクリーンに映し出すという方法を採用していた。くらもちの皇子は、本来ならば、五人のうち二人目に登場する人物だが、順序を変え最後に彼の物語を描いている。くらもちの皇子の話が、面白くて劇化しやすかったのか。限られた二十分の中で全ては描けないのだが、明らかに「かぐや姫の話」とは違う「竹取物語」を意識しており、「なよたけのかぐや姫」と「天の羽衣」だけではない物語を表現しようとしたとわかる。

b・c からは、登場人物への生徒たちの意識が伺える。「竹取物語」で理解した、翁とかぐや姫を表現する配役を選び、イメージ通りに演じたことに満足している。稿者の主観だが、落ちついて優しい昔話のおじいさんではなく、あれこれと気を揉みあたふたし、喜んだり悲しんだり忙しい翁であった。「竹取物語」から読み取った生徒たちの翁像を見た思いがした。

d・e・f は衣装や小道具などについての言葉である。劇化するにあたり、周辺の文化にも興味を持って調べ、表現しことがわかる。さらに、劇は体育館で行われたが、教室には「竹取物語」の世

界」として、スクリーンに映し出したイラストの原画、貴公子たちの説明、あらずじや衣装の説明などが展示されていた。生徒の言葉によると、「せっかくな調べたのに見てもらわないと勿体ない」らしい。

「竹取物語」の劇は文化の部で最優秀賞をとった。文化祭後、他の先生方もこの劇をとっても褒めておられたが、「面白かった」「よくやった」に続き「でも、翁はあんな感じではないの？」という声があったのが印象的だった。喜劇化した「竹取物語」だと思われたようである。この発言は、一般的な「かぐや姫の話」の翁と劇中の翁の印象の違いからきているのではないか。しかし、この劇で表現されていた生徒の解釈の方が、より「竹取物語」の翁であったと思う。

#### 4 おわりに

生徒には、様々な古典の文章を読ませなければならぬし、読ませたい。限られた授業時間ではテキストの全文を読むことは難しいが、細切れの時間を継続して利用することで全文を読むことができる。この実践で何が達成できたのか。考えたことを以下にまとめる。

##### ① テキスト

学習者の発達段階や到達度により、テキストは工夫されるべきである。今回は大学入試に対応する力が求められる生徒たちが対象であったため、まずは原文で、その後に口語訳で、という手順にした。朝は、読んだ原文がよくわからなかったとしても、数時間後には口語訳を読むことになる。全文を読む場合、内容がわからなくなれば

次を読む意欲を失うので口語訳は必要だが、初めから付ける必要はない。数時間のうちに疑問を解決させる、今回は二つのテキストにより、全員が飽きずに読み通すことができたのではないか。

##### ② テキスト全体を論じること

一部分を読むだけでははつきりと言えないことでも、全体を知ることと自分の知識と結びつけて論じやすくなる。例えば、かぐや姫の人物像。「かぐや姫の話」では、かぐや姫にしる翁にしる具体的な人物像はあまり浮かばず論じようがない。しかし、全体を読むと、かぐや姫ならば「小悪魔的」「意地悪」など自分の中の知識と結びつき、論じることができた。これが批評につながるのではないか。

##### ③ 語り手との対話

テキスト全体を読むことで、生徒の意識は「なぜこのようなことを描いたのか」「何を表現したかったのか」に向かいやすくなった。それまでの古文の授業では、内容そのものに意識が向かい、「作者」に注目することはなく、テキストの向こうにいる語り手は生徒たちと離れた存在であったように思う。しかし、今回の実践では、「作者」の意図を問う感想が見られた。離れた時代の人々と対話することは、古典を学ぶ意義としても重要である。

##### ④ 読みの構えの形成

③で述べた「語り手との対話」は、古典の学習に限らない。生徒たちには、現代文（評論）の学習時にも「筆者はどんな立場から発

言しているか」を考えさせるようにしていた。この習慣が③で述べたような読みを生んだのかもしれない。同じテーマの評論でも、筆者の立場によって論証の方法や内容は変わる。このことを学ばせた。二年次に行った環境問題をテーマとした比較読み（「自然と人間」村上陽一郎 科学哲学の立場、「地球温暖化を防ぐ」佐和隆光 経済学の立場）では、この読みの構えを強調して授業を行った。この読みの構えはその後のデイベート学習の際にも生かされたと感じる。

#### ⑤ 表現への志向

この学習は表現そのものを目的としていない。意識が表現へと向かったのは、読み手である生徒たちが、「竹取物語」の人物を生き生きとイメージでき、魅力を感じたからであろう。表現への意欲が生まれれば、そこからは生徒たちの得意分野で、様々なメディア（劇そのもの、ポスター、イラストをパソコンに取り込みスクリーンに映し出す、など）を用いて表現できる。古典文学は、歴史的にも様々な形態で親しまれてきた。この劇も、古典に親しむ一つの受容の形態として、そのような流れに位置づけられるのではないか。

※注 この実践は、竹村信治先生「翁の物語としての『竹取物語』」（『国語教育研究』44号）に示唆を得て行ったものである。稿者も『竹取物語』を読み直し、「かぐや姫の話」とは大きく異なる内容・人物への面白さを感じて実践を試みた。

（武田中・高等学校）

資料 1

朝プリント7 古典 朝プリント第7回目

( ) (組) (番 名前) ( )

☆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(口語訳も考えながら読むこと)  
くくらの息子の嘘がバレる！

かかるほどに、男どちもいづれ、庭に出て来たり。一人の男、文様みに①文をはきまで申す。「内匠寮の匠、あやべの内麻呂申す、玉の枝を作り仕まつりしと、少なからず。しかるに、②嘘いまだ偽らず。これを賜ひて、家子に賜はせむ」と言ひけり。竹取の翁、この匠らが申すことは何事ぞとかたがふをり、皇子は我にもあらぬ③気色にて、肝消え入り給へり。これを、かぐや姫聞きて、「この奉る文を取れ」と言ひて、見れば、文中に申しけるやう、「皇子の君、千日、いやしき匠らともどもに、同じ所に隠れ給ひ、かき玉の枝作るに④賜ひて、官も賜はむ」と⑤仰せ給ひき。これをこの頃桑するに、かぐや姫が要し給ふべき⑥なりけりと承る。かぐや姫より誂賜はらむ。「とあるぞ、かぐや姫、暮るるままにA想ひむむむの地、笑ささかえ、翁を呼びて言ふやう、「まこと言葉の木か」とぞ思ひ」x y。Bかかあるまじきまじきにて可なりければ、は返日給へ」といへば、翁「作らせた玉の枝と聞きて、返さむ」といへば、「いとやすし」とうなづきををり。かぐや姫、心晴れて、ありつゝ歌の返し、まことかと聞きて見れば言の葉をかされる玉の枝にあり」y けり」

- 問一 ①〜③の漢字の読みを書きなさい。  
① ② ③ ④

問二 例綴語 a e の助動詞について、意味と活用形を書きなさい。

a(意味):	活用形:	b(意味):	活用形:
e(意味):	活用形:	d(意味):	活用形:

問三 例綴語 A のようにかぐや姫が思っていたのはなぜか。「わが」は幸く思う、悩むこと

問四 例綴語 B を口語訳しなさい。

問五 x y 【】 x 【】 y 【】 「けり」をそれぞれ正しい形に活用させて入れなさい。

朝プリント7 古典 朝プリント第7回目

( ) (組) (番 名前) ( )

☆ 口語訳 くくらの息子の嘘がバレる！  
こうしているうちに、男たちが六人連れ立って庭に現れた。一人の男が文様みに手紙を挿んで申し上げる。「内匠寮の匠、あやべの内麻呂と申します。玉の枝を作るのに、良力したこと、少くありません。それなのに、報酬を未だ頂いていません。報酬を頂いて弟子に頂かせたい」と言った。竹取の翁は、「この匠たちが申していることは何のことだと首をかしげていた。くくらの息子は茫然自失の様子をつぶしていらつゝやる、これをかぐや姫が聞いて、「この匠が差し出している手紙を取れ」と言つて手紙を員と、手紙の中に申し上げていることは、皇子は千日間身分の低い匠たちと一緒に同じ所に隠れなざつてつばな玉の枝を(私たち)「作らせなざつて、出来上がれば、官職も下さらうとおっしゃいました。このことをこの頃考えてみるに、かぐや姫が必要となさっているのだと承知しています。かぐや姫がか報酬を頂きたい」とあるのを、かぐや姫は、目が暮れるままにつらら思つていた気持ちで笑えよるほどになり、翁を呼んで言った。「本当に言葉の木かと思いました。このように驚きあきれろそ(作りごと)であったので、早くお返しください。早くお返しください」と言つと、翁は「作らせた玉の枝と聞くと、返すことはとても簡単」と頷いていた。かぐや姫は心が晴れて、以前のくくらの息子の歌の(返し)の歌を詠じ、本物の玉の枝かと思ひ、話を聞き玉の枝をよく見ると、金の葉ではなく、言の葉が飾り立てた飾りの玉の枝であったこととすよ、と申つて、玉の枝も(皇子に)返した。

- 問一 ①〜③の漢字の読みを書きなさい。  
① 文 ふみ ② 祿 ろく ③ 気色 けしき ④ 仰せ おおせ

問二 例綴語 a e の助動詞について、意味と活用形を書きなさい。

a(意味):	完了	活用形:	終止形	終止形
e(意味):	打消	活用形:	連体形	連用形

問三 例綴語 A のようにかぐや姫が思っていたのはなぜか。「わが」は幸く思う、悩むこと  
約束を果たしたくくらの息子は結婚しなければならぬと思つていたから。

問四 例綴語 A を口語訳しなさい。

問五 x y 【】 x 【】 y 【】 「けり」をそれぞれ正しい形に活用させて入れなさい。

x y けり



